

原著

美術教育における和洋の比較鑑賞の試み

—相違と共通性を意識した中学生の作品批評を通して—

高橋 文子¹⁾

Comparison of Appreciation Techniques of Japanese and Western Art in Art Education
Through a Contrastive Discussion of Variety and Similarity at a Junior High School in Japan

Fumiko Takahashi

要 約

美術鑑賞における作品批評の語彙の獲得と深まりを目的として、中学校第3学年において比較による相違と共通性を見出す鑑賞指導を行った。生徒が参照しやすい美術資料集に掲載してある作品の中から「月光菩薩立像とサモトラケのニケ」、「風神雷神図屏風とヴィーナスの誕生」、「平等院鳳凰堂とランス大聖堂」を対比題材として取り上げた。主に日本と西洋の同構図の作品から、相違点と共通点に着目させることによって、これまでの主観的な感想中心の鑑賞から、批評的見地の習得を目指した。気付きや感受内容を言語化したワークシートや鑑賞文を分析して、それらの獲得を検討した。日本と西洋の比較鑑賞における相違と共通性の視点は、可視的な「即物的記述」レベルから、不可視の「意味的解釈」「本質的直観」レベルへの道筋を往還しやすく、生徒の作品批評の語彙の獲得において有効であることを明らかにした。

キーワード：鑑賞教育、作品批評、和洋の比較鑑賞、相違と共通性、美術文化

1. 本稿の目的

本稿は、日本と西洋の美術作品の相違と共通性の理解を深める指導が、中学3年生の作品批評の語彙の獲得に有効であることを、鑑賞ワークシート及び鑑賞文の実際から検証するものである。具体的には、共通性のみられる日本と西洋の絵画、彫刻、建築作品を選定し、比較鑑賞題材として取り上げ、生徒が見出した「相違点」と「共通点」の語彙を検討する。そして、それらの語彙を「即物的記述」「意味的解釈」「本質的直観」レベルに類型することにより、生徒の

感受内容及び批評レベルを明らかにする。

2. 比較鑑賞に関する先行研究概観

日本と西洋の比較鑑賞に関わる研究としては、岡田清、香川勇、泉谷淑夫、木下悌二、有田洋子、藤原智也、岡田匡史等の理論及び実践研究があげられる。本稿では、より本質に迫る岡田清と、藤原智也に着目する。

おそらく美術教育における和洋の比較鑑賞を、方法として最初に提案したのは、岡田清である。岡田は、『美術鑑賞ノート』(1951)¹⁾を記し、特に鑑賞におけ

1) 高橋 文子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) takahashi-fumiko@tokyomirai.jp

る比較法の効果を主張した。「よく見よと十ぺんいうよりも比べるとよい」という見出し語は、生徒の実態に即した鋭い指摘である。この中で、岡田は「日本と西洋の美術、その間には何らかの共通とあるいは全く相反する美性格がある。」²⁾と東西の美術作品を独自の卓越した視点で42対選んで提示する。岡田の著述に通底する、「鑑賞とは美を味わうことであり、知識ではなく、心の動きである」という一貫した姿勢は、鑑賞が美的体験であることを確認し、多くの示唆を与える。「ミロのビーナスと百済観音」の対比は、ビーナスの重心が片足に乗り塊感の強い均整美に対し、百済観音の左右に揺れない正面性が醸し出す線的な流麗美が浮かびあがり、異質の美を見事に対比している。しかし、これは岡田のロマンチックな語り誘われる東西の比較鑑賞の指南書であり、実践には触れられていない。中学生の視点で作品を比較鑑賞した時に、果たして岡田がいうところの日本と西洋の「精神の違い」まで感受することができるのか、本稿ではその実際を検討する。

藤原智也(2010)は「対照性と類似性を基軸とした比較による鑑賞教育方法論」研究において、美術上の造形性と象徴性の理解を目的とした比較による鑑賞教育の方法論を示唆する³⁾。藤原は、鑑賞活動が分析の道筋を進み過ぎて、始めに感受したことを置き去りにしてしまう懸念から、ヨハネス・イッテンの「直観的思考」を十分に感じ取らせ、分析内容を造形要素に還元しながら探るシステムを提案する。藤原の問題意識は、学習の内容や目標が焦点化された教師の授業構築にあり、教師の私的な作品選定や一過性の対応を懸念する。「風」の象徴性の理解を目的とした作品選定と授業実践は、生徒の感性を刺激する優れた内容である。さらに藤原は、教師側では「対照性と類似性」という用語を、学習者側では「相違点と共通点」と用語を分けて使用しており、教師側の授業構築の姿勢を強く感じさせる。しかし、ここで挙げられているのは風の事例のような同一テーマにおける比較鑑賞であり、東西の文化比較をねらいとしたものではない。

3. 比較鑑賞指導の基礎理解

(1) 比較要素

日本文教出版社の美術教科書では、現場の支持が高いという理由で比較鑑賞題材強化の方針が打ち出されている。「中学美術2・3年上」⁴⁾の「日本絵画の造形美」の頁では、伊藤若冲の「動植綵絵より群鶏図」と円山応挙の「木賊兔図」が取り上げられている。江戸時代中期の絵画の共通性と、作家それぞれの造形美に注目した選定である。また、「北斎と遠近法」の頁では、江戸時代に西洋美術の影響を受けた葛飾北斎の「富嶽三十六景 江戸日本橋」とカナレット「大運河」が同様の遠近表現として掲載されており、一点透視法構図の浮世絵版画と油彩の対比である。

教科書事例に見られるように、比較鑑賞は、観察や気づきが助長され、思考を深める道筋が自然と立ち上がってくる利点がある。比較の要素として、その作品を構成する全ての要素がその対象となる。主題の比較、造形要素(構図、色彩、形態、材料、技法等)の比較、感覚・印象の感受内容の比較、文化史的背景の比較、作家の比較などが具体的な比較項目にあげられる。これらのどの要素にスポットライトを当て、何が浮かびあがり、どのような作品を選択するか、授業構想における作品選定は、教師側の「相違と共通性」に関する見識が求められる。

(2) 鑑賞文語彙指導の指標

鑑賞の語彙指導に当たって、筆者は、授業づくり研究会における小泉晋弥から提案されたバクサンドールの「美術批評の言葉」を指標とした⁵⁾。それらは、レベルの異なる言葉であり、「原因語」と類型される視覚で確認できるものを示す言葉、「印象語」と類型される作品を見ることによって鑑賞者に立ち現れる言葉、「例示語」と類型される鑑賞者の知見にあるものと結び付けた言葉の3つに大別される(表1)。

指導に当たっては、作品の魅力を伝え、読み手に強く訴える説得力のある鑑賞文作成のポイントとし

表1 バクサンドールの作品記述言語

Cause words 原因語	絵の原因となるものを指し示す言葉 ：使用色 筆致 造形要素等
effect words 印象語	作品を見ることにより出現する言葉 ：魅力的な 驚くべき
comparison words 例示語	何かと比較した言葉 ：○○みたい ○○と似ている

て、3種の言葉をバランスよく使えることを目指した⁶⁾。

4. 和洋の比較鑑賞実践の試み

2011～2012年に、F中学校にて、筆者が実践した事例を対象として検討する。

(1) 第3学年の鑑賞作品選定の課題

当時の第3学年の懸案事項は、学習指導要領解説の鑑賞の目標「ウ」の美術文化に関する扱いである。「日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き、それぞれのよさや美しさなどを味わい、美術を通じた国際理解を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること」と掲げられている「諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き」という点において、何をどのように比較すべきか、様々な可能性が検討される⁷⁾。

東西の関連という観点からは「浮世絵とゴッホ」、「モネとジャポニズム」等が教科書や資料集等では取り上げられていた。鑑賞題材選定においてどのような作品を選定し、ねらいに適した第3学年後学期の鑑賞プログラムを作成するかを検討した。

(2) キーワードに表れる相違点と共通点

「美術資料」⁸⁾には、比較鑑賞題材として日本建築と西洋建築の対比が掲載されている。「平等院鳳凰堂」と「ランス大聖堂」は図版も多く適した題材であると判断した。授業では、比較鑑賞の考え方と面白さを共有できるように、共通点と相違点を記入しやすいワークシートを作成した(図1)。そのキーワードについて全体で話し合いながら、同様のもの

を黒板に記し、視覚的に確認できる造形要素及び生徒の感受内容を整理した。

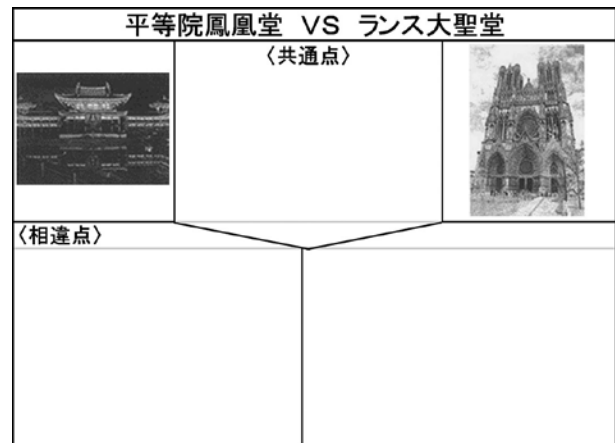


図1 美術比較鑑賞ワークシート

5. キーワードによる比較鑑賞の実際

(1) 学期末テストにおける鑑賞課題の検討

生徒が手元で参照しやすい美術資料集巻末頁に掲載されている「美術の流れ(美術史略年表)」から、和洋それぞれ類似性のある作品を検討し、最終的に「月光菩薩立像」と「サモトラケのニケ」、俵屋宗達作「風神雷神図屏風」とボッティチェリ作「ビーナスの誕生」を選択した。地球儀上でかけ離れた距離のある2作品の比較は、時空を越えた対面のもでもあり、これまで生徒が向き合ったことがない課題となった。

学期末テストの実施に当たっては、ニケ像の図版が全体像を把握しにくいものであったため、「勝利の女神、大理石像」という注釈を加えた。配点については、当初は記述量のみカウントして共通点を5項目記述で9点、相違点を10項目記述で8点ずつ計25点と設定した。しかし、採点の際、「どちらも人間がつくった」「○○がある」「○がない」といった安易な記述の生徒と、深く感受している生徒と同点であることを問題視し、フィギュアスケートの採点方式を参考に、基準点と芸術点と分けて配点することに変更した。記述量が到達していれば各5点ずつ計15点とし、残りの10点は芸術点として加えた。採点には長時間を要し、生徒が幅広い視点で鑑賞を

行っていたことを確認した。



図2 キーワードによる比較鑑賞解答例

(2) 「月光菩薩」VS「サモトラケのニケ」比較鑑賞に用いられた語彙分析

4クラス、160名程の生徒が認識、感受した相違点と共通点は、実に様々な言葉で示された。それらの言葉群の類型化については、金子一夫の「即物的記述」「意味的解釈」「本質的直観」の上昇を指標に行った。以下に代表的なものを示す⁹⁾。

最終的に共通点は、①「人間」、②「神様のイメージ」、③「宗教」、④「彫刻」、⑤「布」、⑥「白」、⑦「神秘的」の7類型とした。①「人間」カテゴリの「人間のような形」「人体をモデルにしている」「人のようで人でない」の記述から、生徒はこれらの像の中に人間の形を見ている。この中で「人のようで人でない」は、鑑賞上直観的、象徴的な優れた考察である。また、③「宗教」カテゴリの「祈りの対象」「宗教に関係がある」「信仰対象」「あがめられる」

の言葉は、表現主題に関連する感受である。②「神様」カテゴリの「神のつかい」という言葉の選択からは、コンテンツ(要素)からコンテキスト(文脈)を作り出す読み手の物語性のある創造力を確認することができた。比較鑑賞の共通性の要素を抽出する活動の中で、生徒の思考が②、⑦といった神秘的な部分の感受へ向かっていることは興味深い。

相違点については、项目的に和と洋が呼応しなくても、気付いた順に羅列するように記述を促した。

表2 比較鑑賞における生徒の使用語彙類型表
〔サモトラケのニケ〕と〔月光菩薩〕の共通点と相違点

共通点

- ①人間のような形/人体をモデルにしている/人のようで人でない
- ②女神/菩薩という実在しない神様/神のつかい
- ③祈りの対象/宗教に関係がある/信仰対象/あがめられる
- ④身体を包む布/衣/流れるようなライン/曲線的
- ⑤台座に乗っている/2本足で立つ/彫刻
- ⑥素材の色/白っぽい/単色
- ⑦神秘的

相違点

サモトラケのニケ	月光菩薩
翼をもつ 羽がある	両手を合わせている
はばたく	寡黙 おとなしい
へそがある	体の中央に飾りみたいなひもの
首がない	結び目2つ
一歩踏み出すポーズ	祈りのポーズ
光り輝くような	落ち着いた感じ
女性的	肩幅が広く男性的
古代ギリシャ風	中国風
重量感がある	男にも女にも見える
印象が強い	印象がうすい
前へ向かっていくイメージ	たたずみの静のイメージ
大理石	顔と手がリアル
ギリシャ時代に追求した美	奈良時代の美
今にも動きだしそう	いつまでも静止してそう
順風満帆というイメージ	明鏡紫水みたい
太ももが目立つ	体のラインが見えない
赤という炎のイメージ	静かで紫のイメージ
不完全	完全
朝っぽい	夜っぽい
少し荒々しい	じっとしている
豊満	静謐
風の中に立っているような	池の水面に立ってそう
神	仏
	左右対称の流れるような衣
	全体の統一感がある
	周囲をそれとなく圧倒
	少しふてぶてしい
	くつが上むき

しかし、多くの生徒が判断の観点を基に両作品を比較し、並列した記述をしていることを確認した。「一歩踏み出すポーズ」と「祈りのポーズ」、「光り輝くような」と「落ち着いた感じ」、「古代ギリシャ風」と「中国風」、「ギリシャ時代に追求した美」と「奈良時代の美」、「前へ向かっていくイメージ」と「たたずみの静のイメージ」、「今にも動き出しそう」と「いつまでも静止してそう」、「順風満帆」と「明鏡紫水」、「赤という炎のイメージ」と「静かで紫のイメージ」、「不完全」と「完全」、「朝っぼい」と「夜っぼい」、「豊満」と「静謐」、「風の中に立っているような」と「池の水面に立っていそう」、「神」と「仏」など優れた対比が確認された。これらの言葉の選択は、画面上の事物を基にして、「〇〇な感じ」といった例示語を用いながら感受イメージを形成して言語化されたものである。

以上、「月光菩薩」と「ニケ」両像の対比を通して、美術科の鑑賞課題における原因語から印象語、また、原因語から例示語を生む道筋が、生徒の感性と繋がって表出される事例を示した。

(3) 「ヴィーナスの誕生」VS「風神雷神図屏風」 比較鑑賞に用いられた語彙分析

どちらも大画面の作品で、「ヴィーナスの誕生」は175×278cmは畳3畳分程、「風神雷神図屏風」は154×169cmであり、一回り小さいサイズ感である。今回使用した図版は切手二枚分程の小さな画面であり、十分な鑑賞条件ではなかったが、「美術資料」のカラー図版の精度に助けられ、作品鑑賞が成立した。美の女神、風神、雷神といった物語性の強い作品群であるため、ヴィーナスの問題文に「ギリシャ神話で語られる美の女神ヴィーナスの誕生」という注釈を、解答用紙には、「The Birth of Venus」「Wind Got and Thunder God Screen」という英名の情報を加えた。以下に生徒から挙げられた共通点、相違点の語彙を検討する。

結果として共通点の語彙は、①「風」、②「神様」、③「左右の構成」、④「宙に浮く」⑤「裸体、裸足」、⑥「空想の世界」、⑦「派手」と7類型となった。

空想の世界として如実な浮遊感と神々の姿、そしてそれを支える構図の共通性について、多くの生徒が言及していた。平面作品のためか、画面内の情報量が多く事物的な共通点が大部分を占めた。その中でも、⑤「裸体、素足」カテゴリーに含めた「露出が多い」「薄着」「お腹が丸見え」や①「風」カテゴリーの「右側の人布をもつ」等の気付きは、細部観察の鋭いものであった。「なぜ」の疑問符と繋げて「なぜ、素足なのか。」「なぜ、右側の人布をもっているのだろう。」と問いを組み立てることは鑑賞活動の思考の質を高める手立てとして有効である。

相違点は、(2)と同様に、「即物的記述」、「意味的解釈」、「本質的直観」を指標として類型化した。言葉の記載に当たっては、「と」を挟んで「ヴィーナスの誕生」で挙げられた言葉を前に、「風神雷神図屏風」のものをその後ろに置く。

即物的把握レベルとして、①「陸・海・空」と「空」、②「海の上にいる」と「空中にいる」、③「緑色の背景」と「背景は金だけ」、④「4人の構成」と「1対1の対」、⑤「貝殻に乗っている美の女神」と「黒雲に乗っている」、⑥「影がついている」と「影がついていない」など6観点を顕著な要素として確認した。

地域や年代等関連のない絵画世界の対比であるために、生徒の感受に混乱をきたすのではないかと不安があった。しかし、要素のそれぞれの気付きや比較は、それぞれの絵画世界を混ぜるのではなく、それぞれの絵画世界を詳細に見る手立てとして働いた。明らかにヴィーナスの背景の奥行きを感じ取る力が、比較する前と後では、違っている実感をもてた。

意味的解釈レベルでは、「花が舞うような明るさ・祝祭的・女性的な柔らかさ・清らかなイメージ」と「壮大なスケール・勇ましい・男性的・力強い・まぶしい・怖い」といった感受の対比が見られた。「天使」と「悪魔」、「お父さん」と「お母さん」の対比イメージはいささか形式的であるが、「表情がこうごうしい」と「表情がユーモラス」、「そよ風になび

く感じ」と「強風にあおられている感じ」「人間的」と「人間離れしている」は本質的直観に近い優れたものであった。

類型表作成にあたって「即物的把握」は比較的捉えやすく、「意味的解釈」と「本質的直観」の分類は模索状態であった。「本質的直観」は「事実」や「判断」ではなくくれない瞬時に感じ取る「直観」であると判断して類型した。

鑑賞に当たって自由な感受にウエイトを置いたため、生徒にはタイトルのみを与え、ギリシャ神話の女神ヴィーナスに関する情報は共有せずに行った。解説を補足すると、ヴィーナスは、成熟した大人の女性として海から誕生して貝殻の上に立ち、霊的情熱の象徴であるゼピュロス（西風）に乗って、岸へと吹き寄せられている。季節の女神であるホーラたちの一人が、花で覆われた外套を女神へと差し出している場面である。そういった予備知

識がないにもかかわらず、「視点の移動が中心→左→右」と「視点の移動が左→右」に移動しているという視線経路の気付きは物語を提示する構図解釈の上で秀逸であった。「右側の女性が誕生したヴィーナスに衣をかけてあげようとしている」、風神雷神が「シーサーに似ている」という気付きは、今後の批評の広がりにつながる要素である。

以上、比較鑑賞における語彙の類型化により、共通点、相違点を総括した。「相違と共通性」の視点による作品対比は、生徒の観察や気付きを促し、それぞれの作品感受を深める実際を明らかにした。

6. 鑑賞文による比較鑑賞の実際

(1) 比較鑑賞文の特性

ここでは、生徒の具体的鑑賞文に表れる差違と共通性について検討する。中学3年生の鑑賞文例1を詳細に示し、文を連ねる鑑賞文という表出の特徴を

表3 比較鑑賞における生徒の使用語彙類型表（「ヴィーナスの誕生」と「風神雷神図」の相違点）

相違点		ヴィーナスの誕生		風神雷神図屏風	
		事物レベル	感受レベル	事物レベル	感受レベル
象徴	本質的直観		花が舞うような明るさ 祝祭的 清らかなイメージ 表情が神々しい		まぶしい 怖いイメージ 表情がユーモラス 神様が宿っている
感覚的	意味的解釈		母性的な柔らかさ お母さんみたい 天使のイメージ そよ風になびく感じ 人間的 視点の移動が中心→左→右 熟女がでてきている		壮大なスケール お父さんみたいな感じ 悪魔のイメージ 強風にあおられる感じ 人間からかけ離れた世界 視点の移動が左→右 人間ばなれしている 勇ましい男性的 力強い ポーズが大胆 シンプルな構成
概念的	即物的把握	陸・海・空 海の上にいる 緑色の背景 地平線が見える 背景に木々 背景が細かい 花が散っている 4人の構成 中心にも人がいる 男女が風をおこしている 貝殻に乗る美の女神 長い髪 右側の女性がビーナスに衣をかけてあげようとしている 青の布 影がついている	緻密な構図 落ち着いた色合い 洋風 やわらかで丁寧な線	空 空中にいる 金ばくくに白と緑と茶 限定された色彩 背景は空間のみ 背景は金だけ 1対1の対 左右の存在感 鬼 黙っているようだ 黒雲に乗っている へそが見える かみなりの太鼓と風のふくろ 髪が逆立つ 耳がとがっている シーサーに似ている 目力 目がいかつい ひらひら 影がついていない 足首に飾りを付けている	大胆な構図 イラストっぽい 和風 荒々しい線

考察する。

まず「平等院鳳凰堂とランス大聖堂の共通点は迫力です」と挙げ「一言に迫力と言っても、どちらの作品も、全く違う迫力を感じます。ランス大聖堂は、石材でできているせいか、とても開きそうにない門のようなイメージを感じました」と、ランス大聖堂の第一印象を「門」という例示語を使って表している。そして「よくみると、ところどころに人の形や何かを表す紋章などがあって、神秘的です」「見る物全てを圧倒する威圧感を感じました」と観察した事物を基に、「神秘的」「威圧感」等感受の言葉が続く。そして「一方、平等院鳳凰堂は少し穏やかなイメージです。威圧するのではなく、包み込むような印象を受けました。木材でできているせいか、見ているなんとなく心が落ち着きます。扉が開いていて引き込まれそうです」と記している。これら記述は印象語を丁寧に対比しているところが特徴であ

り、説得力がある。1、2年時に記述に時間を要して十分に表現できなかった課題を克服して「感受、発見内容を工夫して伝える」鑑賞の観点別評価において「十分満足」なAレベルに到達したと判断した。このように、鑑賞文記述は、先のキーワード記述に比べ、文章の特性から生徒の思考の流れを示している。

(2) 「平等院鳳凰堂とランス大聖堂」の共通点の実際

中学3年生160名程の鑑賞文の類型結果は以下の通りである。共通点については、①「左右対称」②「神を祭る」③「色あせていて古い」④「豪華」⑤「彫刻技術がたけている」⑥「人々を魅了」⑦「整った感じ」⑧「別の世界へのあこがれ」の8つのカテゴリとなった。④～⑧の「心的」感性的カテゴリの言葉が多くなっているのが特徴であり、生徒が和と洋の世界遺産建築に心を動かされたことが推測で

表4 比較鑑賞における生徒の使用語彙類型表（「平等院鳳凰堂」と「ランス大聖堂」の相違点）

相違点		平等院鳳凰堂		ランス大聖堂	
		事物レベル	感受レベル	事物レベル	感受レベル
象徴	本質的直観		やすらぎ 親しみのある和やかな雰囲気 まっすぐで清らか 神たちがリラックス もの静かな竜水		派手 力強い 荘厳 威厳 神たちが祭りをしているよう 賛美歌のような静の神聖さ 暴れ出しそうな怪獣 炎 人間でない何か
感覚的	意味的解釈		力強くたたく武士 きれいな別荘 白鳥が翼を広げて飛び立つ 受け入れてもらえそうな 開放的な文化 内と外でつなぐ 解放しみんなで楽しもうとする文化 静 地面にどっしりと 単純だが計画されている シンプル 手を地面に広げている 内部は落ち着いてりりしい 池に映る双子の平等院 心温まる		りりしく立つ背の高い兵士 かわいらしいお城 とげとげのハリネズミ 邪悪なものの侵入を拒む 閉塞的な文化 内と外で遮断 他人を警戒し心が閉じている 文化 動 天空へ 複雑だが安定している レースのように繊細な装飾 手を空に伸ばしているよう 神のような圧力 壁のよう そびえ立っている 冷たさ 重々しい 富士山のような周りにかなうものはない
概念的	即物的把握	木造建築 木組み 2羽の鳳凰の飾り ゆったりと水平に伸びる構成 自然と一体化 自然の中 周りの背景や自然も含めて1つのもの 自然が建築の一部 自然と共に共生	和風	石造建築 石積み 花を模したような飾り 高く垂直に伸びる石壁 都会の中 その建物だけで1つのもの マリア様 銅像、やりをもった兵士	洋風

きる。①の「左右対称」と④～⑧の印象語は密接につながっており、「神聖な感じ・洗練された空間・哀感」や「強い安定感・堂々と自信に満ちて・不動・威圧・強い」など生徒の言葉の選択のセンスを確認した。

「意味的解釈」の中でも、「外から見たものと内部ではどちらも正反対」の捉えは、やや説明不足のため補足すると、平等院鳳凰堂は外観については、大聖堂に対してシンプルであるが、内部については、阿弥陀如来像に加えて壁面に飛天が飾られ金色の華やかなイメージがある。一方、大聖堂は外観の荘厳な装飾に対して、内部の石積み空間はシンプルであり、外観と内観の装飾に関する文化コードともいえる解釈を確認した。

特に⑧「別の世界」に関する批評が優れていたのは、鑑賞文例2である。鳳凰堂の「素材の木の性質が乗り移ったかのようにまっすぐで清らか」な印象と、大聖堂の「曲線的なラインが多くまるで賛美歌のような静かな神聖さ」の印象を対比させている。そして、後半部分では、「それなのに、なぜか2つとも見比べていると同じにおい感じる」の感受、思考は秀逸である。「日本の人も、フランスの人もここで、死後の世界へ思いを馳せていたのだと思うと、形も印象も違うけれど、どちらも心を穏やかにしてくれるような空気の落ち着きが感じられた」と宗教的な視点での共通点をまとめている。

同様に文化的な宗教観の背景を指摘しているのは鑑賞文例3である。「2つの建物が美しく見えるのは、左右対称という理由があると思いますが、それ以上に人々の極楽、天国に憧れる気持ちが両方から伝わってきた。同じ憧れに対して同じような落ち着いた配色で表現しているにもかかわらず、何故こんなにもイメージが異なるのだろうか」という素朴な疑問は、死に向かう文化対比として重要であり、生徒たちの問題意識に強いインパクトを与えていることを確認した。

(3) 「平等院鳳凰堂とランス大聖堂」の相違点の実際

生徒の記述した相違点を、事実と思考の枠組み、「即物的把握、意味的解釈、本質的直観」の枠組みでその作品批評言語レベルの類型化を試みた(表4)。即物的対比として特徴的だったものは、①「自然の中」と「都会の中」、②「周りの背景や自然もふくめて1つのもの」と「その建物だけで1つのもの」、③「自然が建築の一部」と「自然と共に共生」が多く挙げられ、日本と西洋の建築の特質を対比することによって、より深く感じ取っていた。次に多くの生徒が掲げていた観点は、④「ゆったりと水平に伸びる構成」と「高く垂直に伸びる石壁」に代表される建築外観の観点であり、「手を地面に広げている」と「手を空に伸ばしているよう」、「白鳥が翼を広げて飛び立つ」と「とげとげのハリネズミ」といった意味的解釈の対比の例示語も確認した。

また、鑑賞文例4に見られた「『堂』の漢字のような一糸乱れぬシンメトリー」と象徴的な例示をあげた後に、「平等院鳳凰堂は、ピーンと張りつめた目の前にある池のような『静』、ランス大聖堂は今にも動き出しそうな『動』どこか似ていて何かが違う2つの建築物達。どちらもまるでその国の象徴の様だ」と⑤「静と動」という強い対比を感じ取っている生徒も見られた。このような意味的解釈の対比は、「水・炎」「開放的な文化・閉塞的な文化」内と外でつなぐ・内と外で遮断」等にも見られた。感性的カテゴリーの印象語の対比としては、⑥「地味」と「派手」、「心温まる」と「冷たさ」があげられ、特にランス大聖堂の「そびえ立っている」風景を「富士山のような『周りにかなうものはない』」という例えは、共通する見上げる人々の感嘆を感じさせる。さらに、「当時の人々のひたすら完全なものを求めていた」姿勢がシンメトリーな設計を生んだのではないかという思索や「高い志」等の語彙から、文化を生み出した当時の人々の気概にまで思いを馳せている点を確認した。

装飾に関する記述が豊かな記述も見られた。鑑賞

文例5では、「まず目に入るのは建築物の細かなところに施された飾りである」と着目し、「ランス大聖堂は花を模したようなものがあるが、平等院鳳凰堂は特に工夫した豪勢な飾りは見られないが、天守閣に2羽の鳳凰が相對していることが分かる。多くの外国の建築物を見ても建築物の飾りに人型や獣型ではなく鳳凰をチョイスしたというのが、そもそも日本とフランスの違いなのではないかと感じとれる」と鳳凰の象徴性を突いている。

鑑賞文例6では「日本側は自然が建築の一部となっている」に対してランス大聖堂の「神聖で冷たくしかも神のような圧力を感じるのは、自然というあたたかい命がきれいさっぱりないからなのかもしれない」という指摘を取り上げる。それぞれ一枚だけで鑑賞するスタイルであったらここまでの感受は得られないだろう。この生徒は「日本側は池があることでそれが鏡のようになって、双子の平等院が楽しめる」とその愛着を示していた。

以上、対照性と類似性を意識した日本と西洋の比較鑑賞の試みは、中学3年生の美的感受を促し、その精神性をも受け止め、鑑賞文作成において高度な批評を可能とすることを明らかにした。

7. 結論

日本と西洋の同構図の絵画、彫刻、建築作品を相違点と共通点の視点から比較鑑賞することは、中学3年生において、それぞれの作品世界を詳細に見る手立てとして働き、様々な「原因語」「印象語」「例示語」を生み出した。

「サモトラケのニケと月光菩薩」の事例では、どちらも「人のようで人でない」存在であることをとらえ「順風満帆」「明鏡紫水」といった異なるイメージを共有することで、それぞれの文化の中で、美に憧れる普遍的な心情等へも意識を向けることのできる教育的可能性を確認した。

日本と西洋の比較鑑賞における差違と共通性の視点は、可視的な「即物的記述」レベルから、不可視の「意味的解釈」「本質的直観」レベルへの道筋を

往還しやすく、生徒の作品批評の語彙獲得において有効であることを実証した。

註

- 1) 岡田清『美術鑑賞ノート』都出版社、1951
- 2) 同上、P.3. 岡田は、美の種類として『美術鑑賞入門』P.34において、「崇高美」「優美」「稚拙美」「悲壯美」「滑稽美」「豪壯美」を挙げている。
- 3) 藤原智也「対照性と類似性を基軸とした比較による鑑賞教育方法論－直観的思考と分析的思考による鑑賞力の育成とその系統的発展－」『美術教育学』第31号、2010、pp.329-341.
- 4) 平成24年度版教科書「美術1」「美術2・3上」「美術2・3下」、日本文教出版株式会社
- 5) Baxandall, "Michael. Patterns of Intention: On the Historical Explanation of Pictures," 1985, pp.5-8.
小泉氏によれば、バクサンドールは、言語はある特定の絵画を記述するために十分な装置ではなく、一般化の道具であるという。つまり一瞬にして絵画を感受できる「見る」という行為に比べ、言語は時間を経過する故、言語で表す叙述 (description) の不十分さを最初に問題視している。その上で絵画を語るために3種類の言葉があると述べている。
- 6) 高橋文子「生徒による『作品批評の言葉』研究－『美術科鑑賞テスト』の試み」『茨城大学教育学部附属中学校研究紀要』第38集、2009年、pp.11-22.
- 7) 「中学校学習指導要領解説美術編」、文部科学省、2008、pp.78-86
- 8) 京都市立芸術大学美術教育研究会、日本文教出版編集部、茨城県造形教育研究会編集「美術資料」秀学社
- 9) 金子一夫「表現主題を感情と像の言葉で分析・構成させる美術教育方法論」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』第59号、2010、pp.47-67. 表現主題を支える作品の3側面とその解釈段階「即物的記述」「意味的解釈」「本質的直観」を指標に、作品批評言語レベル類型表を作成した。

(たかはし ふみこ)

【受理日 2018年11月15日】

